



「本日は御来店、誠にありがとうございました。明日もまた、お待ちしております」

閉店の音楽が静かに流れます。ここは、回転ずし店。お客さんが帰ると、厨房から従業員たちがフロアに出てきました。みんなマグロやカツオなど、魚の姿をしています。でも、着ぐるみを着ているわけではありません。

「おい、今日は、俺の勝ちだな」

「何だと。俺の方の勝ちだ」

「俺は五百皿でたぞ」「俺は五百一皿だ」

タコ星人とイカ星人が注文された皿の数を互いに自慢し合っています。

「マグロ船長は千皿だぞ」副船長のカツオ星人が何気なくつぶやきます。それを聞いて、タコ星人とイカ星人は黙ってしまいました。

「仲間で喧嘩しても仕方がないぞ。星に帰るためにはもっと資金が必要だ」

マグロ船長がみんなを励まします。

「一体、今、いくら、たまったんですか」

右斜め上目づかいにヒラメ星人が尋ねます。

「九九九億フィッシュです。あと、一億フィッシュで故障した宇宙船を直せます」

電卓を叩くのはウナギ星人です。

「そうか、あと一億フィッシュか」

大きくうなづくマグロ船長。

「大丈夫。俺が頑張れば、あと、一週間で達成しますよ」タコ星人が胸を張ります。

「いいや、俺が頑張れば、六日です」イカ星人が口をとがらします。

「もういい。とにかく、フィッシュ星に帰れる日も、もうすぐだということだ」

マグロ船長の大声に二人は黙りました

「お言葉ですが、自分の体を削るのは、もう限界なんですけれど・・・」

やせ細った白い胸を見せるホタテ星人。

「僕もそうですよ。体が粒のように小さくなってしまいました」

イクラ星人がぶくぶくと赤い泡をふきます。

「みんなには迷惑をかけているのは分かっている。だが、もう少しの辛抱だ」

一番身を削っているのはマグロ船長です。だけど、リーダーとして泣き言は言えません。

「みんなで、頑張ろう」「おー」

魚の形をした宇宙人たちは、その場に寝転がり、明日に備えて眠りにつきました。

彼らは、フィッシュ星からやってきたフィッシュ星人でした。彼らの星は百パーセント海に覆われており、海の中に工場などを建設してきましたが、海の汚れがひどくなり、病気になる者が増えてきました。そこで、地球に移住をしようと調査にやってきたのです。

でも、地球の海も汚れていて、自分たちの祖先であるマグロやタイなどが、顔をしかめながら海を泳いでいました。肩を落とすマグロ船長たち。地球は移住先にはふさわしくないと自分たちの星に帰ることにしました。

でも、いざ帰ろうとすると、エンジンが壊れ、宇宙船が動かなくなったのです。そこで、エンジンを修理するお金を稼ぐために、回転ずし店を始めたわけです。お店は宇宙船で、すしのネタは、自分たちの体を削ることにしました。それで、「この店のネタは新鮮で、ピチピチしている」と評判になりました。

また、全員の従業員が魚の姿をしているので、子どもたちは大喜び。おかげで、エンジンの修

理代も着実にたまっていきました。

朝が来ました。宇宙船の前にはもうお客さんが並んでいます。

「へえい、いらっしやい」サバ星人がお客さんを案内します。厨房では、船員たちが交代で、包丁で体を削り、すしを握っています。

「ヤッホー、マグロだ、マグロだ」

ボックス席の子どもがはしゃいでいます。やはり、一番人気はマグロです。だけど、マグロ船長はこれまでの激務が続き、やつれていました。突然、マグロ船長が倒れました。

「大丈夫ですか」

副船長のカツオ星人が抱き起こします。

「いやあ、これくらい」と、立ち上がろうとしますが、再び崩れ落ちてしまいました。

「もう、店は閉めよう。今あるお金で宇宙船を直そう」カツオ副船長が提案します。

「どうだ、伊勢エビ星人。できるか？」

「何とかやってみましょう」伊勢エビ星人は、長いひげを触り、背中を丸めながら、何日もかけてエンジンの修理に取り組みました。

フィッシュ星人たちが地球を去る日がやってきました。最後の日は、お世話になった人間たちにすしを無料で振舞うことにしました。そのため、お店は朝から大混雑です。

「いらっしやいませ」店内では、イカ星人やタコ星人が十本と八本の手足を使ってお客さんを誘導します。厨房では、マグロ船長もすしを握ります。最後のお客さんを見送ると、宇宙船は飛び立ちました。宇宙から見る地球は近くで見るとよりも青く澄んでいました。

「まだ、大丈夫のようだけれど、もっと大事にしないと俺たちの星のようになるぞ」と誰かが呟きました。宇宙船は家族の待つフィッシュ星に向かって、猛スピードで進みます。